書評

Toshifumi GOTŌ

in co-operation with Jared S. KLEIN and Velizar SADOVSKI

Old Indo-Aryan Morphology and Its Indo-Iranian Background

(Österreichische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse. Sitzungsberichte, 849. Band. Veröffentlichungen zur Iranistik. Nr. 60, Wien 2013, 222pp.: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften)

堂山　英次郎
大阪大学大学院文学研究科

0. はじめに

本書は古インドアーリヤ語（＝ヴェーダ語：サンスクリット語古層）[1] の形態論を，その前段階にあたるインド・イラン祖語，更には印欧祖語からの歴史的変遷の中で捉え，イラン語派の形態論をも含む形で体系的に記述したものである。印欧語比較言語学並びにインド学にとって，今世紀に達成された，また達成されるであろう記念碑的出版の１つとなることは間違いない。最初に本書が関係諸分野にとって持つ意義と影響とを，簡単な研究史とともに示す。

ヴェーダ語，殊に最古の文献たる『リグヴェーダ』（RV）の方言は，古印欧諸語の中でもその圧倒的な古さ，保守的な言語体系，極めて正確に伝承された膨大なテキスト群，そして同じく古代語（アヴェスタ語，古ペルシア語）を残すイラン語派との親密な関係性のゆえに，印欧祖語からの音韻・形態の変化が辿り易いモデルケースとして，印欧語比較言語学をその誕生以来常に支え続けてきた。そして印欧語学の発展は，インド学の発展にも大きな役割を果たした。ヴェーダ語の歴史的背景を知ることは古代インド文化の源流の理解に直結するからであり，実際，多くのインド学及びイラン学の重要な成果や発見が比較言語学によってもたらされた。しかし，長い研究史の中で幾つもの優れた記述文法が書かれたきたものの，比較言語学的な観点から書かれた形態論は殆ど無いに等しい。唯一，印欧語学の成果やイラン語にも配慮しつつ包括的なサンスクリット文法の記述を試みたものに J. WACKERNAGEL & A. DEBRUNNER, *Altindische Grammatik*. Göttingen 1896–1930（AiG）が

[1] 以下「ヴェーダ語」で統一。本書評で用いる略号は次の通り：[O/Y]Av. = [Old/Young] Avestan, OP = Old Persian, PIE = Proto-Indo-European, PII = Proto-Indo-Iranian, Ved. = Vedic, YS = Yajurveda-Saṁhitā, ŚB = Śatapatha-Brāhmaṇa。文法用語の略号は本書のそれに従う。

ある。サンスクリット語のあらゆる文献と語形とを対象とした当時の最高水準の網羅的記述文法であり，今日でも語形の学術研究の出発点になるものである。しかしその分類・記述・用例の徹底した細かさ・幅広さは，文法現象の歴史的変遷を系統的・立体的に俯瞰するには不向きである。更に惜しむべきは，この大規模プロジェクトが音韻，複合語，語形成（名詞派生），名詞曲用，数詞，代名詞で止まり，動詞編が書かれることのなかった点である。そもそも印欧語比較言語学が，20世紀半ば以降に本書著者の師であるKarl HOFFMANN及びその門下・影響下の研究者によって長足の発展を遂げたことに鑑みれば，AiGの言語学的記述も大幅に書き直されるべきことは言うまでもない。こうした状況が21世紀に入っても続く中で，著者が最高水準の知見を動員してヴェーダ語の歴史形態論全体を，しかも共時的記述文法としても機能する形で，僅か150頁余りの単著にまとめることに成功した意義は甚大という他無い。

本書を可能にしたのは，無論第一には著者自身の印欧語比較言語学・インド学・イラン学全般に亘る幅広い知識と深い洞察とに他ならないが，HOFFMANN以降の印欧語学者によってなされた幾つかの重要な仕事もその背景にある（cf. 本書 p.1f.）。恐らく最も大きな出来事は，M. MAYRHOFER, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, I–III, Heidelberg 1992–2001（分冊は1986から；EWAia）の完成であろう[(2)]。既に印欧語学における不動の地位と信頼を得た感があり，印欧語全般の語源辞典としても，A. WALDE & J. POKORNY, *Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen.* I–III. 1927–1932 Berlin/Leipzigを殆ど過去のものにしたと言っても過言ではなかろう。また多かれ少なかれ本書の手本と見なしうる個別言語の歴史文法書も出版された。H. RIX, *Historische Grammatik des Griechischen. Laut- und Formenlehre.* Darmstadt 1976には，ヴェーダ語の語形と重要性とが十分に配慮されており，事実上印欧語比較言語学の模範的文法書でもある。そしてK. HOFFMANN & B. FORSSMAN, *Avestische Laut- und Flexionslehre*, Innsbruck 1996, ²2004は，アヴェスタ語の形態論を印欧祖語・インド・イラン祖語からの歴史的発展の中で記述したもので，当然ヴェーダ語にも随時言及しており，インド・イラン語派の研究者には欠かせない一書である。また印欧諸語全体における動詞語根及び語幹の形成がH. RIX et al., *LIV: Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen*. Wiesbaden 1998, ²2001により概観出来るようになったことも大きい。以上の研究史は，本書が新水準の古インド・イラン語研究に不可欠の最後の1ピースであったことを意味する。我々はここに漸く印欧祖語からインド・イラン祖語を経てヴェーダ語へと至る歴史形態論を，一書の中に辿ることが可能になったわけである。

1. 内容概観

本書はそのタイトルが示す通り，ヴェーダ語の語形ほぼ全てに歴史的説明を与えるとともに，関係するイラン語形及び印欧語他語派の重要な語形にも適宜言及している。情報量は厖大であるにもかかわらず分類・記述はいずれも簡潔・的確であるため，構成は通常の

(2) MAYRHOFERの生涯と仕事，そしてEWAiaの編纂の経緯と意義については，本書著者による同氏の訃報（『歴史言語学』1 [2012] 129–133所収）を参照。なお，本書はHOFFMANNとMAYRHOFERの思い出に捧げられている。

記述文法の枠組みから大きく外れることがなく，よって研究者・学生のいずれにとっても馴染みやすいハンドブックの体をなしている。大きく「名詞」「数詞」「代名詞」「動詞」「副詞・不変化詞」の章に分けられ，「名詞」の章は比較・最上級を含む各種名詞派生接尾辞を扱う他，詳細な複合語の解説をも併録する。付録として "sandhi と *rukī*", "laryngeals; *seṭ, aniṭ*" についての簡潔な概要が記載され，巻末には参考文献及び優れた諸索引が付されている。特に事項索引では文法事項や各種形態素の多くが，より細かな下位概念や具体的形態素等に分類され，また語索引では名詞・動詞は各屈折形とともに挙げられている。重要概念にはドイツ語も併記してある他，用語自体が本文中に出てこなくとも索引に用語を入れる（e.g. "HOFFMANN's suffix" s.v. "*-$h_3$én-/-h_3n-", p. 175)，本文中の内容を一言で説明する（e.g. "Perseveration" s.v. "nonce form", p. 177)，本文中には無い説明的文言から特定の事項を引ける（e.g. "marking the feminine → motion suffix", p. 176)，等の様々な工夫が見受けられ，利用者の便を極力配慮したものとなっている。語索引には，本文中で扱わなかった語形の追加的情報・参考文献も見られる（e.g. s.v. *ar/ṛ*, p. 201, s.v. *sah*, p. 182)。

各文法項目の冒頭には，それぞれの基本書とも言える重要な参考書や論文が挙げられている。また個々の語形や現象についても，その都度脚注（または本文で）基本的かつ信頼出来る二次文献のみを厳選して載せているため，読者を徒に混乱させることが無い。HOFFMANN & FORSSMAN（→ 0.）が参考文献を本文中ではなく別頁に載せたことにはそれなりの意図があろうが，各項目・語形ごとに先行研究やその簡単な内容を紹介するという本書のスタイルの方が，幅広い使用者のニーズに応えると思われる。

本書ではヴェーダ語の後の発展も随所に意識されており，しばしば叙事詩のサンスクリット語や中期インドアーリヤ語までもが言及される。適宜指摘される Pāṇini 文法による語形・現象の扱い方も（→ 用例箇所索引 p. 222)，言語学者・インド学者双方にとってありがたい情報源である。用例の語形は全て実際のテキストから意味とともに挙げられ，出典テキストは（特に YS 以降)，その言語層の表示に有意的なように分類されて各語形に付されている。RV に関しては，特に重要性の高い語や希少な語には例証数や具体的箇所が明示され，必要な場合はその都度語形や韻律の問題も論ぜられる。RV 及び OAv. については韻律上復元できる音を含めた語形を下付き文字で表示し，また Av. 語形では，本来語源に関係無く二次的に入り込んだ音（epenthesis, anaptyxis；韻文では韻律的に無価値）を全般に亘って上付き文字で区別する（cf. p. 171)。こうした記述は，比較言語学と実際のテキストのいずれにも熟達した人間にしか出来ないことであり，ともするとテキストに疎遠なまま理論ばかりに偏りがちな言語学者が多い現代において，実例の読解があってはじめて言語資料は議論の俎上に乗り得ることを改めて実感させる。

2. 本書の特徴：ablaut-scheme, BRUGMANN's law, laryngeal

本書全体を貫く最大の特徴は，曲用・活用を一貫して ablaut-scheme（いわゆる「活用タイプ」: Flexionstyp[3]）に基いて理解・説明している点であろう。これは印欧祖語の語形変

[3] 他にも様々に呼ばれる：Akzent- und Ablauttyp, Flexions- und Akzenttyp [inflexional and accentual type], Akzentsitz-Typ, Ablautklasse, etc.

化（屈折）に設定される説明原理で，屈折語形を「語根・接尾辞・語尾」の3要素からなるものと考え，アクセントを持つ *e 母音が1つのパラダイム中でどの要素に現れるかに従い，acrodyn[amic], proterodyn[amic], amphidyn[amic], hysterodyn[amic]（および meso-dyn[amic]）という4つないし5つのパターンに分類したものである。一般的には名詞曲用の原理として用いられることが多いが，実際には動詞を含む屈折変化全体において優れた理論として機能することは，著者が ablaut-scheme の説明を本書冒頭に（p. 7f.）置いていることからも窺えよう。保守的なヴェーダ語はこの印欧祖語の各パターンをよく保存しているが，それが決して過去の遺物としてではなく，言語全体に亘って生きたシステムとして機能していることを，本書は明快に示している。

ablaut-scheme の機能の仕方が最もよく現れているのが，名詞のパラダイムである。特に p. 21ff. の *-ī-* 語幹以降ほぼ全ての語幹の曲用は，印欧祖語のものを引き継ぐものであれ，インド・イラン語派あるいはインド語派で改変されたものであれ[4]，いずれかの scheme によって整合的に説明される。一見この理論は，専門家以外には事態を複雑にするように見えるかも知れない。しかしながら，記述文法では「不規則」「例外」「多様性」によって説明するしかない名詞の曲用が，実は異なる ablaut-scheme の現れに過ぎないことを知る意義は，サンスクリット語初学書にとってさえ大きいのではなかろうか。例えば，同じ *-i-* 語幹であっても *rayí-*（nom. *rayís*, gen. *rāyás*）と *páti-*（nom. *pátis*, gen. *pátes*）が全く異なる曲用を見せるのは，前者が amphidyn.（nom. **réh$_1$-i-s*, gen. *reh$_1$-i̯-és*）であり，後者が本来 proterodyn.（nom. **pót-i-s*, gen. **pot-éi̯-s*）だからである（p. 28f.）。同一の *-u-* 語幹名詞が見せる多様な曲用も，2つの異なる scheme に由来する（p. 26ff., 30）: nom. *krát-u-s, vás-u-s* :: dat. *krát-v-e*, gen. *vás-v-as* (acrodyn.) ~ *krát-av-e, vas-ó-s* (proterodyn.)。また，perf. part. act. の接尾辞（p. 49f.）が *-vā́ṁs-/-úṣ-* を示すのに対し（アクセントは二次的），比較級のそれ（p. 47）が *-(ī)yāṁs-* ~ *-(ī)yas-* の交替を示すのは，前者が少なくとも PII 段階で hysterodyn.（PII **-u̯ā́s-* ~ **-uš-´*; ただし PIE amphidyn.? → n. 132），後者が proterodyn.(PIE **´-i̯ōs-/-i̯os-* ~ **-i̯és-*）であったことを示唆する（いずれも強語幹の *-ṁ-* は二次的挿入）。

動詞に関しても，様々な現象が ablaut-scheme によって随所で合理的に解説されている。例えば redupl. pres. ind. であれば amphidyn. であり（1sg. *bí-bhar-mi* ~ 1pl. *bi-bhṛ-másí*），鼻音語幹なら hysterodyn.（3sg. *kṛ-ṇó-ti* ~ 3pl. *kṛ-nv-ánti*）である（p. 103ff.）。pres./aor. part. act.（*-ánt-* ~ *-ṇt-´*）は hysterodyn. であるが，NARTEN-pres. や重複非幹母音幹では，アクセントがそれぞれ語根部及び重複部（強語幹）に固定しているのに応じて，接尾辞は一貫して zero-grade に留まる（p. 45）[5]。この事実は著者が述べるように，ablaut-scheme が「語形成全体の問題であって，接尾辞や語尾だけの問題ではない」（p. 46）ことを如実に語る。また，非幹母音幹の optative は原則 hysterodyn. であるが（3sg. act. *-yā́-t* < **-i̯éh$_1$-t* ~ 3sg. mid. *-ī-tá* < **-ih$_1$-tó*: cf. p. 92），印欧祖語に遡る "acrodynamic root-aor."（p. 95）では，上記の分詞と同様接尾辞は zero-grade **-ih$_1$-* に固定される。よって **-eH*（> PII **-ā*）で終わる語根であれば，ヴェーダ語の opt. 法語幹には *-e-*（< **-aH-ih$_1$-*）が予想されるが（OAv. *zaē-ma* < PII

(4) 場合によっては，平均化の進んだヴェーダ語に対して，アヴェスタ語が古く多様な ablaut scheme を保っていることがある。*-u-* 語幹はその典型である（cf. p. 26, n. 79）。

(5) 同じことが intens. part. にも言える。

j^háH-ī-ma)，実際にはこの *-e-* を保ったまま更に（強語幹として）*-yá-* を付け直して，言わば擬似 hysterodyn. に改変してしまっている：1sg. act. *dhe-yā-m* (cf. 3pl. *dhe-y-ur*), 1pl. *sthe-yā-ma*（p. 95, 108）[6]。これに対しアヴェスタ語は，語根を hysterodyn. opt. に完全に従わせている：OAv. 1sg. act. *dii$_a$ąm* < *d^hH-i̯aH-am* ~ OAv. 1sg. mid. *diiā* < *d^hH-iH-Ha*。これら opt. の例は，ablaut-scheme が語形改変の過程を浮き彫りにするだけでなく，改変においてさえ生きた原理として機能していることを示す。

このように，本書は全体を通じて ablaut-scheme を基軸に構成されているが，それに加えて，またそれとともに，laryngeal 及び BRUGMANN's law という 2 つの重要な音韻理論の活用が，個々の語形の歴史的説明を可能にしていることも忘れてはならない。前者については本書巻末 p. 172 に，また BRUGMANN's law は本文中に（p. 84, p. 128）簡単な説明を与えているのは，著者がこれらを重視する現れであろう。実際，本書に見る語形の実に多くが，上記の 3 理論全てあるいは任意の組み合わせによって初めて整合的な説明を得る。*-an-* 語幹の曲用の多様性を例に取ると，*uk-ṣán-* や *vr̥ṣ-an-* は acc. *ukṣ-áṇ-am*, *vr̥ṣ-aṇ-am*（~ gen. *ukṣ-ṇ-ás, vr̥ṣ-ṇ-as*；*vr̥ṣ-* のアクセントは二次的）を示し，これらは強語幹で接尾辞 *-én-*（> Ved. *-án-*）を持つ hysterodyn. と説明される（p. 38: **1.2.10.** [1]）。一方で *tákṣ-an-* や *áś-man-* が acc. *tákṣ-āṇ-am, áś-mān-am*（~ gen. *tákṣ-ṇ-as, áś-n-as* < PII **ać-mn-ás*；*tákṣ-, áś-* のアクセントは二次的）を示すのは，これらが強語幹で接尾辞 *-on-* を持つ amphidyn. であり，その母音には BRUGMANN's law が働いているからである（開音節で PIE *-o- > PII *-ā-: p. 38f. [2]）。更に *yúvan-*（p. 42 [3]）は，いわゆる「HOFFMANN の接尾辞」*-h$_3$én- (-h$_3$ón-)/-h$_3$n-* による amphidyn. の scheme に由来する（ヴェーダ語では hysterodyn. に改変）：sg. nom. *h$_2$i̯éu̯-h$_3$ō(n) → Ved. *yúvā*, acc. *h$_2$i̯éu̯-h$_3$on-m̥ > Ved. *yúvān-am* ~ gen. *h$_2$i̯u-h$_3$n-és > Ved. *yū́n-as*。acc. の形はやはり BRUGMANN's law によって，また gen. は laryngeal にかかる音韻規則（*VHC > V̄C）によってのみ理解可能となる（上記 *rayí-*, gen. *reh$_1$-i̯-és > rāyás* も参照）。また動詞では，特に perf.（p. 119），caus.（p. 128）及び medio-passive aor.（p. 118f.）に，BRUGMANN's law と *-o- を閉音節化する子音としての laryngeal の有無が綺麗に現れている：perf. act. 3sg. *k^we-k^wór-e > ca-kā́r-a :: 1sg. *k^we-k^wór-h$_2$e > ca-kár-a*；caus. *g^wom-éi̯e- > gām-áya- :: *ǵonh$_1$-éi̯e- > jan-áya-*；med.-pass. aor. 3sg. *é-k^wor-i > á-kār-i :: *é-ǵonh$_1$-i > á-jan-i*。

3. 各論

もとより個々の章や項目を全て紹介することは出来ないので，以下では主要な上位範疇である「名詞」と「動詞」の章を更に詳しく取り上げたい。

3.1 名詞

名詞の章（p. 8ff.: **1.**）は格語尾の一覧から始まる。各格語尾の成り立ち，用例（イラン語形も），問題点などが注の中で詳細に解説される。語幹の種類により多様な形成を示す loc. sg. だけは 2 頁を使って更に詳述されており（p. 14f.），loc. sg. の特殊性の全体像を知る

---

[6] 同様にアヴェスタ語内部でも，本来の OAv. *da^{i}d-ī-t̯*, YAv. *da^{i}δ-ī-t̯* < *d^há-d^hh$_1$-ih$_1$-t* に対して，二次的に平均化された YAv. *da^i-δiiā-t̯, da^{i}θ-iiā-t̯* が存在する：p. 104。

ことが出来る。名詞語幹形成（p. 15）の記述全体に関わる大きな特徴は，分類の原理が自ずと記述文法とは異なることであろう。後者に一般的な「母音幹」「子音幹」といった便宜的な分類法は，歴史形態論においては余り意味を為さない。本来的には，ablaut を示さない幹母音幹（themat[ic] stem，PIE *-*e/o*- 語幹：-*a*- 語幹；更に女性 -*ā*- 語幹も）と，ablaut を示す非幹母音幹（athemat[ic] stem）という区別こそが有意的であり（p. 8f., 15f.），後者は更に上述の ablaut-scheme によって分類される。もし「母音幹」等の分類に従うならば，語根部分が変化しない -*a*- 語幹に対して，なぜ -*i*- 語幹や -*u*- 語幹では接尾辞部分が ablaut を示したり，語尾が -*a*- 語幹と大きく異なるのかについて要領を得ないし，また同じ母音や子音に終わる語幹に，なぜ複数の異なる曲用の種類が存在するのかも謎のままであろう。むしろこうした不規則や多様性の塊に見える曲用のあり方が，本来の原理に従えばいかに論理的な構造として理解し得るかが，本書からは自ずと明らかになる（2. を参照）。

ablaut を示さない幹母音幹の説明は，殆ど語尾の説明を以て尽くされているため，本章の殆どは ablaut を示す非幹母音幹（-*ī̆*-/-*ŭ*- 語幹及び，-*ī*- 語幹曲用を一部取り入れた派生 -*ā*- 語幹をも含む）の解説に充てられている。下位分類は一般的な語末音に基づくが，ablaut-scheme と意味によって更に細かく分けられ（p. 24ff. -*i*- 語幹，-*u*- 語幹；p. 38ff. -*n*- 語幹，p. 30ff. -*tar*-/-*tr*-/*tr̥*-; -*ar*- 語幹等；2. も参照），それぞれに特徴的な語は個別に議論されている（p. 30 *krátu*-, p. 32 *nár-, stár*-, p. 36f. *mā́s*-, *púmāṁs*-, p. 42 *kanyā̀*-, p. 43 *pánthā*-, etc.）。また語根複合語の語根部分の ablaut（p. 16）や，印欧祖語に遡る曲用の 1 システムとしての *r/n*-heteroclitic paradigm（p. 32f.）など，比較言語学的観点からの議論や項目立てが目立つ。各種名詞派生接尾辞においても，同様の観点から印欧語本来の古い Vr̥ddhi とインド的 Vr̥ddhi の違い（p. 53f.）や「CALAND の suffix」（p. 54）が個別に取り上げられている。

pp. 55–59 は名詞複合法の説明に割かれている。HOFFMANN–FORSSMAN（²2004）のアヴェスタ語文法が複合語に一切触れていないのとは対照的である。本項目はアヴェスタ語の複合語形成の理解にもそのまま役立つであろう。本節の説明の特徴としては，伝統的な区分法（Dvandva, K[arma]dh[āraya], Tatp[uruṣa], Bahuv[rīhi]）に言及しつつも，Kdh, Tatp., Bahuv. については，より本質的な区分概念として endocentric（内心的：Kdh., Tatp.）と exocentric（外心的：Bahuv.）という分類を用いることである。複合語全体の意味が後肢の品詞・意味の枠内に留まるのか，それとも複合語化することで後肢の品詞・意味とは別の新たな形容詞が生まれるのか，という構造上の違いである。これは決して理論上の問題では無く，筆者も述べるように（p. 57f.），複合語のアクセントの原則は実際にこの区分を背景にして作用している。このことはヴェーダ語の複合語が，後肢が前肢によって同格的に限定されるか（Kdh），斜格の機能によって限定されるか（Tatp.）ということよりも，内心構造を持つか，外心構造を持つかということを優先して区別していることを示す。複合語に関しては，いわゆる SOMMER-compound に言及していることも特記すべきであろう（p. 58f.）：e.g. *daśāṅgul-á*-「10 指分の長さ」，*tri-yug-á*-「3 世代分の期間」。prepositional governing compounds（*ati-rātr-á*-「3 夜を越えて続く」，*ā-path-í*-「道の上にいる」）への言及も重要である（exocentric）。ただし同じく接頭辞・前置詞を前肢とする複合語には，Bahuv.（e.g. ŚB *úd-bāhu*-「腕を上げた」；接尾辞は付かない）や Kdh（e.g. RV *prá-ṇapāt*-「[更に] 先の孫＝ひ孫」：endocentric）もあることに，読者は注意が必要である。

3.2 動詞

本書における動詞の章の存在は，研究史上特別に重要である。先述のように，ヴェーダ語形態論の最も詳しい記述である AiG は動詞編を含まない。これを引き継いで執筆すべき人間として本書著者の名がしばしば挙げられてきたが，語弊を恐れずに言えば，本書は事実上 AiG 動詞編の簡略版に等しく，しかもそのハンドブックとしての使い易さを考えれば，未来の研究の発展にとっては AiG と同規模のものよりも優先されるべき出版であったとさえ言えるのではなかろうか。

動詞の記述 (p. 79ff.: **3.**) は動詞組織全体の仕組みや原理を立体的に示すことから始まる。そこには著者が長年の研究で培ってきた動詞に関する知識と洞察とが惜しみなく反映されている[7]。まず diathesis「態，voice」に関しては，中動態の諸機能，能動態と中動態との関係，diathesis と語幹形成との関係等が実例とともに概観された後，動詞語根の持つ語彙的意味の諸側面 ── Aktionsart, Verhaltensart, Rektionsart, aspect ── が簡潔に提示される。一見理論的・抽象的に見える部分があるかも知れないが，これらが全て実際の語形と意味の理解から帰納的に導き出された枠組みであることは本章を読めば明らかである。例えば，現在語幹・アオリスト語幹の区別は何のためにあるのか，なぜ特定の動詞は現在語幹またはアオリスト語幹しか持たないのか等の根本的な説明は，通常の文法書に書かれることは無いし，専門書・論文でもその梗概を簡潔に提示するものは存外少ない。現在語幹とアオリスト語幹という「時制幹」の機能差ゆえに，個々の動詞語根はそれ自体の語彙的意味の制約に従い，様々な「拡張」によって各語幹を形成する必要があること，そして何種類もある現在語幹の拡張法とそのための接尾辞・接中辞には一々理に適った意味が存在することを，本書は必要十分に教えてくれる（p. 83ff. + n. 197）。そこでは，いわゆる「第〜類動詞」がいかなる原理のもとに作られた語幹であるかや，その本来の原理と「第〜類」という土着文法の分類には様々なレベルのずれがあること等を知ることが出来る。これら現在語幹の各形成法は p. 99ff. で用例とともにより詳しく展開される。中でも現在非幹母音幹 (p. 101ff. ; 幹母音幹は量が厖大で，また著者自身の主著 Gotō 1987［下注 7］で確認出来る）やアオリスト語幹（p. 107ff.）については，全ての mood に関して代表的なヴェーダ語形が例示されている。

人称語尾は，stative「静態動詞」のそれも含めて一覧表で示されるが（85f.），特に注目すべきは PII 段階の語尾（Av., OP 語形とともに），更に遡って PIE の語尾を順次表示している点（87ff.）である。いかにインド・イラン語派が印欧祖語の人称語尾を引き継いでいるか，換言すれば，印欧祖語の動詞組織の解明にいかにこの語派が貢献しているかがよく分かる。個々の語尾については各所でその起源や問題の所在が詳細に説明・提示されている。例えば，stative の諸語尾とその用例（p. 86 + n. 202, n. 203.）や，opt. 3sg. mid. *-īy-át*（p.

---

[7] T. Gotō, *Die „I. Präsensklasse" im Vedischen*. Wien 1987: 25–29; Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1. *am*, 2. *ay/i*, 3. *as/s*. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 15-4 (1990): 988f.; Überlegungen zum urindogermanischen «Stativ». In: Emilio Crespo & José Luis García-Ramón (eds.) *Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy*. Madrid 1997: 165–170; 日本語で読めるものに，後藤敏文「インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー：枠組み再建のスケッチ」『文化の基礎理論と諸相の研究』岩手大学人文社会科学部総合研究委員会 1992：104–108。

93）の形成過程，perf. ind. 3sg. act. *-úr* < *-ṛ́（p. 120）や 1sg. mid. *-é*（p. 121）の起源に関する鋭い考察は多くの示唆に富む。iptv. sg. *-tu*, pl. *-antu/-ntu/-atu*（inj. + particle *u*）（p. 97）の成り立ちについての説明も納得ゆくものである。

各種 mood「法，叙法」の説明（p. 89ff.）では多くの紙面が optative「希求法」に割かれ（p. 92ff.），aor. opt. の一種である precative「嘆願法」（定訳は無い）の形成過程，*(áti-)ye-ṣ-am*（語根 *yā*）等の二次的に形成された opt.，"PIE acrodynamic root-aor." の opt.，そして独立に形成される themat. root-aor. opt.（*-e*-opt.）等の解説からなる。ここには，opt. に関してもたらされた大小の新知見が全て詰め込まれていると言えよう。injunctive「指令法」は RV の言語と世界観とを理解するための要の 1 つであり，ヴェーダ研究の新時代を開いた K. HOFFMANN, *Der Injunktiv im Veda.* Heidelberg 1967 の研究成果が，語形も機能も含め随所に紹介されている（p. 90, p. 108, n. 243, p. 110, n. 248, etc.）。

現在語幹の中では，athemat. root-pres. の一種である NARTEN-present（p. 84 + 102f.）や stative（101f.）に，十分な言葉が費やされていることも見逃せない。stative 語尾が鼻音語幹に多く見られる（p. 105）などの語幹同士の関係にも触れられている。アオリスト語幹（p. 107ff.）の記述も同様に詳細で示唆に富む。例えば，redupl. aor. のうち作為的な意味（factitive）を担う（長母音重複による）形成は殆どヴェーダ語特有の現象であるが，その下地が既に印欧祖語にもあり得た可能性が指摘されている（p. 111f.）。また，諸 sigmatic aorist 形成の背景が体系的に説明されており（p. 113ff.），J. NARTEN, *Die sigmatischen Aoriste im Veda*, Wiesbaden 1967 に新知見を加えたものを概観することが可能である。各種二次現在幹（p. 123ff.）の中では，近年まとまった研究が殆ど見られない denominative「名詞派生動詞」が特に詳細に扱われ（p. 130f.），形成法の分類とともに踏み込んだ議論もなされている。その際，幾つかの denom. が名詞の一番弱い形から造られることを，複合語形成の前肢における同じ現象と関係付けているのは重要な指摘である（p. 132）。定動詞以外では，infinitive（p. 132ff.）と gerund/absolutive「絶対［分］詞」（p. 141ff.）に詳しい記述がある。前者については，語形判断のための理性的な判断基準（p. 133）や，不定詞から独立して 1 人称定動詞となった *-sé* の形成の背景（p. 135f.）が特に有用である。

4. その他の見どころ

その他，上に紹介し切れなかった特筆すべき事項を羅列する。その多くは，既に知っている者にとっては「痒い所に手が届く」便利なものであるし，初めて触れる者には必見の専門知識であろう。管見の限りどこにも書かれていない新知見・新解釈も，当然含まれる：

音韻：**ṛia* の音韻変化（p. 129, n. 286）

名詞：*-an-* 語幹の中性が単複同形（*-a/-ā*）になることの音韻的説明（p. 41f.）；接尾辞 *-ín-* と *-vánt-* の含意の違い（p. 43）；接尾辞 *-áñc-/-ac-* ~ *-īc-/°(ā)c-* が異なる 2 つの動詞語根による補完現象であること（p. 44）；女性形を派生させる接尾辞（motion suffix）*-ā-* と *-ī-* それぞれの音韻的・形態的使用原則と意味的特徴（p. 51 + n. 141）；インド的 Vṛddhi（→ 3.1）の起源を巡る考察（p. 53f. + n. 147）。

代名詞：印欧祖語での代名詞及び疑問代名詞のパラダイム再建（p. 68, n. 170; p. 73, n.

181）; *eṣá-/etá-*, *syá-/tyá-*, *ena-* の基本的含意（p. 69, 71）; instr. sg. m./n. *enā* の起源（p. 71）; *asáu, adás, amu-* の起源（p. 72f.）等。

動詞：動詞の補完現象（suppletion）（p. 82f.）; aor. ind. の機能（p. 90）; media tantum の動詞が subjunctive「接続法」を（時に perf., fut. も）act. で作る現象（p. 92）; athem. root-aor. iptv. が示す，語幹の ablaut の特異性（p. 98）; *iraj-yá-*^{ti} の語源（p. 107, n. 241）; iptv. の代わりに用いられる inj.（p. 108, n. 243, etc. → 事項索引 p. 175 s.v. "hortative"）; 定動詞として用いられる perf. part.（p. 122f.）; fut. II の含意（p. 124）; periph. fut. 1sg. mid. *-he* の成り立ち（p. 125）; 独立した，語根 + *-sa-nt-* による形成とその意味（p. 126, n. 279）; *-si*-iptve（p. 114f.）; いわゆる *-am*-gerund の機能（p. 143f.）; *éd* + acc. に関する新知見（p. 152, n. 345）。

シンタクス（上記「名詞」「動詞」も参照）：ヴェーダ散文の神学的議論の結論部分に用いられる *evá*（p. 148, n. 326）;「WACKERNAGEL の位置」（p. 149f.）; (*ha*) *sma* + ind. pres. の機能（p. 150, n. 333a）; verbal adjective における行為者（agent）の表し方（p. 139）; *ápi* の語順（p. 151）。

語彙：牛中心の古代インド社会特有の分数表現 *pā́d-, śaphá-, kalā́-, kúṣṭhā-/kúṣṭhikā-*（p. 64）; *pṛthivī́-* がなぜ「大地」を（p. 19），また *candrá-* がなぜ「月」を（p. 36, n. 102）表すようになったのか; *aśvatará-* がなぜ「ラバ」を意味するのか（p. 49）; 物語のタイトル *Vikramorvaśīya, Abhijñānaśakuntalam* 等の複合語をどう理解すべきか（p. 56），等々。

個々の語形や形態素は，その機能・意味と完全に切り離して論じることは出来ない。本書でもこのことは常に意識されており，扱われる品詞の諸カテゴリーに関して，形態素や文法範疇の意味・機能，更には形態論の範囲外のスィンタクスに及ぶまで踏み込んだ説明を行っているのは（→ 上記 **4.** 及び本章），実際のテキストを知り尽くした著者の面目躍如というべきであろう。つまり本書には，形態論の枠組みに囚われず，言語学者やインド学者（特にこれから学問を志す学生）にとって重要なことを最大限盛り込みたいという著者の学問的良心が滲み出ている。本論の一番最後に（p. 151f.），ヴェーダ語には副詞が発展しておらず，むしろ主語の形容や「内容の対格」（inner acc., *Inhaltsakkusativ*）を使った表現を好むという事実や，ヴェーダ語には一般的な「良い」を表す語が無く，これを表現するためには *sú-*を前接した複合語を使った表現に頼るしかないことなど，ヴェーダ語の表現体系全体の根幹に関わるような問題にさえ触れているのが象徴的である。

5. 雑感と補足

本書は文字通り歴史形態論であるから，サンスクリット語の基本的な音韻論だけでなく，比較言語学の基礎的な知識，及びインド・イラン語の音韻法則を知っていることを前提としている。本書の議論全体を通して特に大きな役割を果たす BRUGMANN's law と laryngeal とについては簡単な説明があるが（→ **2.**），これも laryngeal の多様な現れ方を全てカヴァーする訳ではない。他にも STANG's law（p. 17, 18）[8]，LINDEMAN variant（p. 19, 39, etc.），

[8] 本書の事項索引に加えるべきかと思われる。

GRASSMANN's law (p. 97), BARTHOLOMAE's law (p. 19, 139)[9], SAUSSURE-WACKERNAGEL's law (p. 140, n. 308a) 等の「業界用語」についても一応の知識が求められるし，また例えば root-aor. 語幹 *kar-, gam-* の頭音がなぜ「二次的」なのか (p. 108)，動詞 *han* の zero-grade *hn̥-* がなぜ pass. **-i̯é-* (*han-yá-*) と verbal adj. **-tó-* (*ha-tá-*) の前では異なる現れ方をするのか，*dabh* の desiderative 語幹 (*dípsa-* < **dʰí-bzʰa-* < **dʰí-dbzʰa-* < **dʰí-dʰbʰ-sa-* : p. 125) がいかなる音韻法則の順列組み合わせによってもたらされるか等，インド・イラン語派の音韻法則全体が分かっていなければ，説明される個々の語形の真の理解に達することは難しい。しかしこのことは，本書が専門家以外を拒むことを意味しない。むしろその逆で，読み手の様々な学問的背景に従って，それぞれに応じた使い方が出来ることは上に述べてきた通りである。

本書はアクセント規則を章立てて論じることはしていないが，ablaut-scheme 自体がアクセントと連動しているので，語のアクセントについては本文中に明示・暗示されている (*-as-* 語幹名詞の実体詞と形容詞に関する記述も参照 : p. 37)。別の原理が働く複合語については独立に概略がまとめられているほか (p. 57f.)，個別の形態素や語のアクセントについても部分的に触れられている : augment (p. 90)，接頭辞・前置詞 (＋動詞 : p. 145)，particle *hí* (p. 150)。これらはシンタクスに深く関わるアクセントであって，本来は形態論の対象ではない。ただしここまで踏み込んだついでに，文中での動詞のアクセントや voc. のアクセントについての一般原則にも簡単な言及を望むのは，いささか求め過ぎであろうか。

その他，僅かばかり評者の目から補い得るものを述べておきたい：

p. 47f., n. 134 : nom. sg. OAv. *vīd-uṣ*, Ved. *vid-úṣ* について KÜMMEL *Das Perfekt im Indoiranischen.* Wiesbaden 2000: p. 39 は，一連の reduplizierteS Adjektiv (*ji-gy-ú-, ci-kit-ú-*, etc.) に属する可能性を示唆している。

p. 49 : Lat. *mater-tera* には，*mātṛ̥-tama-* (RV 3x) が直接比べられよう。

p. 116 : *-s-*aor. opt.-prec. mid. 1sg.には，*maṁsīya* と並んで dissimilation を受けた *masīya* (RV X 53,4) が，同様に *vaṁsīmahi* と並んで *vasīmahi* (RV IX 72,8) も存在する (HOFFMANN *Aufsätze zur Indoiranistik.* Wiesbaden 1976: II 366 ; J. NARTEN Aor. [1964]: 188f. [→ 3.2] は，語を跨いでの dissim. を想定する : *prathamáṃ ma[ṁ]sīya; bahuláṁ va[ṁ]sīmahi*)。

p. 147ff. : いわゆる *cvi-* 語形 (*mithunī́ kar/bhū*, etc.) は YS 散文以降の形成であるが，どこかに簡単な紹介があると便利かも知れない (cf. p. 152, n. 344a)。

p. 149 : loc. に由来する adv. に関して，privative *a-/an-* を伴う Bahuv. の loc. (及び instr.) による一連の副詞形成 (RV *arajjáu*「縄無しで」，RV *a-vāté*「風無く」，etc.) も含められよう，FORSSMAN, 1997 [1998] (→ 注 7) : 85–111。

6. おわりに

以上ほんの一部しか紹介することが出来なかったが，少しでも本書の意義とその特徴・見どころを伝えられたとすれば幸いである。極めて凝縮された内容を持つ本書を書評する

[9] 本書の事項索引に加えるべきかと思われる。

にあたって，重大な誤解が無いことを願うばかりである。これが比較言語学及びインド学の研究者・学生にとって必携の書であることは繰り返すまでもないが，しかしそのもたらす恩恵は専門研究に対するのみではない。本書に中心的な資料を提供する RV は，人類の共有財産とも言うべき古代の知的営為の結晶であって，本書によって RV の理解が更に進むことは，広く古代世界の思想，宗教，社会，歴史を理解することに繋がる。本書の著者が中心の 1 人となって，現在新たな水準の RV の翻訳（ドイツ語）が進行中であることは必然であろう[10]。以上のことは，著者自身が序文に書いている通り（p. 1），比較言語学という専門分野が人類史の理解にとって根本的な重要性を持つことを示す。本書は今後着実に，関係専門分野のみならず人文学の多方面に多大な影響を与え続けるものと確信する。その恩恵に与る 1 人として，大業を成し遂げた著者に，特別の謝辞と最高の讃辞とを送りたい。

複雑な各種特殊文字に満ちたこれだけの大作であるから，入念な校訂作業をもってしても，細かな誤植が生じることは致し方ない。以下に評者が気づいた誤植を挙げる。ただし，例えば語形中のハイフン前後に不要なスペースが入るなどの，殆ど内容に支障を来さないものについては挙げていない。正誤表は本書に合わせて英語で作成した。言葉による指示や説明は｛ ｝内で提示した。

正誤表

p. 11, n. 22, *l*[*ine*]. 2	§26bd.	→	§26bd).
p. 17, n. 41, *l.* 4	{exchange *pūr* and *pur*}		
p. 23, n. 70, *l.* 4	*tanúvā̊*	→	*tanúvè*
p. 24, *l.* 2	*vi-bhúv-ā̊, tanú-vā̊*	→	*vi-bhúv-è, tanúvè*
ibid., *l.* 7	*camúv-os*	→	*camúv-òs*
p. 37, **1.2.9.2.**, *l.* 5	*snaiθ-iš-qm*	→	*sna^{i}θ-iš-qm*
p. 48, **1.3.1.**, *l.* 8	*hu-baoiδi-tara-*	→	*hu-bao^{i}δi-tara-*
p. 73, *l.* 5	*par-ás*	→	*pur-ás*
p. 79, **1.1.**, *l.* 14	*active*	→	*activa* {as in p. 80, 173}
ibid., **1.1.**, *l.* 16	are	→	is
p. 83, n. 197, *l.* 4 from bottom	medium	→	media {as in p. 79, 92}
p. 85, n. 200a, *l.* 5	incomprehensibly	→	incomprehensively
p. 108, *l.* 14	{a double tilde under *-t* after *cōr^{a}-* should be *-t̲*}		
p. 115, n. 258, *l.* 8 from botttom	*maṁ-s-a*	→	*maṁ-s-ta*
p. 126, n. 279, *l.* 4f.	con, in addition quer	→	conquer
p. 139, bottom	*mit-á-*	→	*mi-tá-*

[10] *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis.* Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael WITZEL und Toshifumi GOTŌ unter Mitarbeit von Eijirō DŌYAMA und Mislav JEŽIĆ. Frankfurt am Main/Leipzig 2007; *ibid. Dritter bis Fünfter Liederkreis.* Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael WITZEL (Buch III) und Toshifumi GOTŌ (Buch IV) und Salvatore SCARLATA (Buch V). Berlin 2013.

p. 153, **Abbreviations ...**, *l.* 22	Sprache: Sprache.	→	Sprache: Die Sprache.
p. 158, *l.* 10 from bottom	hrsrgg.	→	hrsgg.
p. 160, *l.* 11 from bottom	Fluctation	→	Fluctuation
p. 164, *l.* 13 from bottom	satzfügung	→	Satzfügung
p. 166, *l.* 6–7	{insert the following title:} H. RIX, M. KÜMMEL, Th. ZEHNDER, R. LIPP, B. SCHIRMER, *LIV: Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen*. Wiesbaden 1998, ²2001		
p. 169, *l.* 8 from bottom	*Altindische Grammatik*	→	Altindische Grammatik
p. 170, *l.* 13	Caillat	→	CAILLAT
p. 171, *l.* 7	Rāmāyaṇa Epic	→	Rāmāyaṇa (Ep.) {?; cf. *l.* 1}
p. 170, *l.* 3 from bottom	Kauṣītaki Brāhmaṇa	→	Kauṣītaki-Brāhmaṇa
p. 172, *l.* 10	p. 170	→	p. 174
p. 173, left, *l.* 6 from bottom	80	→	79f.
p. 176, right, *l.* 2 from bottom	medium	→	media {as in p. 79, 92}
ibid, right, *l.* 2 from bottom	mezodynamic	→	mesodynamic
p. 179, left, *l.* 12	167	→	171 {?}
p. 185, left, *l.* 10	n. 62	→	n. 61
p. 189, left, *l.* 15	70	→	69f.
p. 192, right, *l.* 18 from bottom	{delete the page number 73}		
p. 193, left, *l.* 8 from bottom	{insert the page number 73 before 149}		
p. 202, right, *l.* 9 from bottom	*spr̥náu̯-/spr̥nu-*	→	*spr̥ṇáv-/spr̥ṇu-*
p. 204, right, *l.* 15 from bottom	*arᵊnau̯-*	→	**arᵊnau̯-*
p. 206, left, *l.* 22	*xšnau̯*	→	**xšnau̯*
ibid., left, *l.* 6 from bottom	**gau̯š-/guš-*	→	**gau̯š/guš*
p. 207, right, *l.* 7 from bottom	*diu̯*	→	**diu̯*
p. 208, left, *l.* 7 from bottom	*pərᵊtau̯-*	→	**pərᵊtau̯-*
ibid, right, *l.* 10 from bottom	*bū/bau̯*	→	**bau̯/bū*
p. 212, left, *l.* 4 from bottom	*hu-baoiδitara-*	→	*hu-baoⁱδitara-*